

即位図屏風の研究

大阪芸術大学 工芸学科 教授 五十嵐公一

昨年度、今まで全く知られていなかった狩野永納の署名と印のある屏風が見つかった。これは六曲一双の三尺屏風であり、画面は鮮やかな彩色、金泥や金砂子を使って極めて丁寧に仕上げられている。作品の状態も良く、狩野永納の代表作と言ってよい屏風である。

その画面から、描かれているのは天皇の即位式と譲位の様子であることはすぐ分かった。しかし、当然ながら、この屏風について論じた研究は全くない。詳細なデータもない。しかし、重要な作品であることは画面を見ているだけでも分かる。

そこで、この屏風を正しく理解するため、まずは何が描かれているのか、どのように描かれているのかを具体的に調べる必要があった。そして、これが本研究の出発点だった。

研究の結果、以下のことが分かった。この屏風の右隻には寛文3年(1663)4月27日に行われた靈元天皇の即位式が描かれている。また、左隻にはそれに先立って同年正月26日に行われた後西天皇の譲位に関する諸儀礼が描かれている。従って、この屏風は「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」と称すべきものである。

江戸時代の天皇の即位の様子を描いた屏風が現在までに何点か知られている。寛永6年(1629)の明正天皇の即位を描いた「御即位行幸図屏風」(ネルソンアトキンス美術館)、貞享4年(1687)の東山天皇の即位を描いた「東山天皇御即位図屏風」(小原家文庫)などであり、その数は多い。しかし、靈元天皇の即位式の様子を描いた屏風は、この「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」の右隻しか知られていない。靈元天皇は寛文3年(1663)から貞享4年(1687)まで在位し、退位後には院政を行っている。朝廷内外に大きな力を持った天皇だった。しかし、即位時に靈元天皇は10歳でしかなかった。その即位式が描かれているのである。

また「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」の右隻は、江戸時代の天皇の即位式を描いた「御即位行幸図屏風」(ネルソンアトキンス美術館)などの屏風と比べて際立った特徴がある。即位式の様子を真南から描く構図が採用されているため、即位した靈元天皇の顔がはっきり見えるように描かれているのである。天皇の顔をあからさまに描くのを避けていたことを考えると、これは注目に値する。

また「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」の左隻には後西天皇の譲位に関する諸儀礼が描かれている。具体的には「警固固関」「節会宣制」「劍璽渡

御」「新主の御所の儀式等」の四つの場面で画面は構成されている。これ自体興味深いことだが、実は天皇の譲位に関する諸儀礼を描いた屏風で現在までに知られているのは、この「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」の左隻だけである。その意味でもこれは貴重な作例だといえる。

更に、諸史料を調べてみると興味深いことに気付く。後西天皇の譲位、そして靈元天皇の即位式が行われたのは寛文3年(1663)なのだが、その2年前の万治4年(1661)正月に禁裏御所が焼失しているのである。つまり、後西天皇の在位期間中に焼失した訳である。この禁裏御所焼失の知らせを受け、すぐに幕府は再建に着手した。そして、寛文3年に新たな禁裏御所が完成した。それと後西天皇の譲位、靈元天皇の即位の時期が重なるのである。新たな御所が再建されるまで、仮御所となっていたのは今出川通に接する近衛邸だった。そこで後西天皇は朝儀を行っていた訳である。つまり、「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」の左隻には後西天皇の譲位に関する諸儀礼が描かれているのだが、その舞台となっているのは仮御所となっていた近衛邸なのである。

このように「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」は右隻にも左隻にも極めて興味深い内容が描かれているのだが、ここで問題が浮かぶ。狩野永納はこの屏風をどのようにして描いたのかという問題である。

現在を生きる我々には大変不思議に思えるのだが、実は江戸時代、天皇の即位式は庶民にも公開されていた。そのため狩野永納は「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」のうち靈元天皇の即位式に関しては実際に見たものを描いた可能性がある。ところが、譲位に関する諸儀礼は非公開だった。そのため狩野永納がそれらを見て描いたとは考え難い。そうすると、それらの諸儀礼に実際に参加して、その様子を狩野永納に伝えて描かせた人物を想定する必要がある。その人物はこの屏風の注文主、あるいは注文主に近い人物ということになるが、それが誰なのかは現時点では分からない。これは今後の課題となった。

なお、この「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」は、2019年1月30日から3月10日まで京都国立博物館が開催する「特集展示 初公開！天皇の即位図」で紹介された。本研究の成果の一端を、この展示に合わせて作られたリーフレットでも記した。